

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## <資料紹介> グローバル・レイバー・ヒストリーの成果と課題

著者	ファンデアリンデン マルセル, 木下 順
出版者	法政大学大原社会問題研究所
雑誌名	大原社会問題研究所雑誌
巻	707・708
ページ	59-86
発行年	2017-10-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/13661">http://hdl.handle.net/10114/13661</a>

# グローバル・レイバー・ヒストリーの 成果と課題<sup>(1)</sup>

マルセル・ファン・デア・リンデン著／木下 順 訳

---

- 1 長い道のり
- 2 グローバル・レイバー・ヒストリーとは何か
- 3 何が達成され、何をするべきか
- 4 行く手に見えてくるもの

「われわれ工業化した西欧「文明」諸国の労働者は、もはや世界の他の地域から「孤立する」ことはできない。われわれの運動はもはや（そして「理論」もまた）一国的な狭いプロセスのなかで行なわれてはいない。われわれは紛れもなく本物の世界革命の只中にいるのだ。」

カール・コルシュがアーヴィング・B. カンターに宛てた書簡（1950年12月6日）より

## 1 長い道のり

世界のさまざまな地域の歴史が互いにつながっているという考えは、とりたてて新しいものではない。何世紀も前からある。例えば、ドイツの歴史家で劇作家のフリードリッヒ・シラーは、1789年にイエーナ大学の冠教授となったとき、就任演説のなかで、「世界で最も遠くにある地域は私たちの贅沢に貢献しています」と述べた。結局、とシラーは続けた。「私たちが身につける服、食べ

---

本論文は、Marcel van der Linden, “The Promise and Challenges of Global Labor History,” *International Labor and Working-Class History*, No.82, Fall 2012, pp.57-76 の翻訳である。

【凡例】①訳注は＊で記した。②原文でイタリック表記になっている語やフレーズはゴシック表記とした。③発音が不明な人名は原文をその後に付けた。④〔 〕内は訳者が意味を補ったことを示す。⑤末尾に「訳者解説」を付した。

- (1) この論文の草稿に対して、同僚のウルベ・ボースマ (Ulbe Bosma)、カリン・ホフィネースター (Karin Hofineester)、ヤン・ルカッセン (Jan Lucassen)、クリスティーネ・モル・ムラタ (Christine Moll-Murata)、エリーゼ・ファン・ネーデルフェーン・メールケルク (Elise van Nederveen Meerkerk) さんがコメントしてくれました。また、この論文はオランダ語で書かれ、ユリアーン・ベンディーン (Jurriaan Bendien) さんが英語に訳してくれました。感謝いたします。このトピックについて、私はさまざまな角度から論文を書いてきましたが、そのなかの主なものは次のとおりです。Marcel van der Linden, “The ‘Globalization’ of Labor and Working Class History and Its Consequences,” *ILWCH*, 65 (2004) : 136-56 ; van der Linden, “Labor History : The Old, the New and the Global,” *African Studies*, 66 (2007) : 1-12 ; van der Linden, “Labour History Beyond Borders,” in *Histories of Labour : National and International Perspectives*, eds., Joan Allen, Alan Campbell, and John McIlroy (London, 2010), 353-83.

物のスパイス、またそれらを買うために支払う金銭、いくつもの強力な薬、そして破壊のための新しい道具、それらは、アメリカを発見したコロンブスや、アフリカ沿岸を周航したヴァスコ・ダ・ガマがいなくても、実現したでしょうか<sup>(2)</sup>。とはいえ、本職の歴史家たちが研究においてグローバルな連環について真剣に考えはじめるのは、それよりずっと後のことである。この動きを先導したのは植民史家や「帝国」史家である。そして経済史家がこれに加わった。[だが]労働史家が間大陸的な視点に興味を示すようになったのは、さらに後のことである。彼らは1970年代までそれぞれの国民国家の枠内にとどまっていた。E.P. トムスンのような、この分野の偉大な開拓者ですら、「一国」労働階級の枠内でものを考えていたのである\*。

大きな転機は1971年に訪れた。この年のアメリカ歴史学会において、ボブ・ホーラーの優れたリーダーシップによって研究グループが組織され、『ヨーロッパ労働史・労働者階級史ニューズレター』の刊行を開始したのである。この出来事は2つの変化をもたらした。第1に『ニューズレター』は大西洋两岸の国々の専門家たちをつないだ。そして第2に「ヨーロッパ」にしか通用しない考え方が急速に影響力を弱めた。数年経たぬうちに『ニューズレター』はメキシコ革命や近現代中国についての記事などを掲載しはじめた。この動向を反映して『[ヨーロッパ労働史・労働者階級史]ニューズレター』は1976年に誌名を変更し、『国際労働史・労働者階級史ニューズレター』となった。

変化は別のところでも生じていた。オーストリアでは1964年にITH (Internationale Tagung der Historiker der Arbeiterbewegung, 労働運動史研究者会議) が結成された。「社会主義」国および資本主義国の労働史家たちが毎年、ITHに集まった。また1970年にはIALHI (International Association of Labour History Institutions, 労働史研究機関国際協会)\*\* が結成された。これは世界中の文書館の連携組織であるが、豊かな国々に偏っている(そしてこの偏りは残念ながら現在も続いている)<sup>(3)</sup>。

この新動向のなかで、国と国との比較が行なわれた。もちろん比較研究はそれ以前にもあった。しかし1970年代そしてとりわけ1980年代には、その数が急増したのである。研究されたのは、どちらかというところ「大きな」国であり、また北大西洋地域の国々だった。なかでも合衆国とイギリス——英語しか話せない研究者でも両国の比較なら可能だ——、フランス、ドイツ、イタリア、ロシアなどが比較の対象となった。もっぱら一人で調査していたので、研究対象は(2か国ないし3か

(2) Friedrich Schiller, "What Is, and to What End do We Study, Universal History," in *Poet of Freedom*, vol. II, trans. Caroline Stephan and Robert Trout (New York, 1988).

\* トムスンの古典を念頭に置いている。Edward P. Thompson, *The Making of the English Working Class* (London, 1963). (エドワード・P. トムスン著、市橋秀夫・芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』青弓社、2003年)。

\*\* IALHIについては『大原社会問題研究所雑誌』702号(2017年4月)に掲載された榎一江による月例研究会報告(74頁)を参照されたい。

(3) ITHは現在では「労働史・社会史国際会議 (International Conference of Labour and Social History)」と呼ばれている。この会議については次のサイトを参照されたい。http://www.ith.or.at (accessed October 15, 2012). また、IALHIの活動についてはhttp://www.ialhi.org (accessed October 15, 2012)を参照されたい。

国程度と）少なかった<sup>(4)</sup>。1980年代後半からは、より規模の大きなプロジェクトが組織されるようになった。それらの多くはアムステルダムの IISH（社会史国際研究所）が提案し、20 以上国の比較が行なわれた<sup>(5)</sup>。

しかしながら、このような「グローバル・ノースの」動向とは別の動きも現われていた。グローバル・サウス<sup>\*</sup>においても、1940年代から労働史・労働者階級史が現われはじめていたが、この動向はアフリカやアジアの植民地における独立闘争に励まされ、また1953年から1959にかけてのキューバ革命にも刺激を受けて活発になった<sup>(6)</sup>。研究の多くは制度分析であった。例えばマレーシアのゴム農園を扱った J. ノーマン・パーマー（J. Norman Parmer）の『植民地の労働政策と行政（*Colonial Labor Policy and Administration*）』（1960年）や、チャールズ・ガンバ（Charles Gamba）の『マラヤにおける労働組合の起源（*The Origins of Trade Unions in Malaya*）』（1962年）などがそれである。しかしその頃すでに「下から」の視点に立つ研究も現われていた。例えばジャン・シェノー（Jean Chesneaux）の古典『中国の農民運動、1919～1927年（*Le mouvement ouvrier en Chine de 1919 à 1927*）』（1962年）やギジェルモ・ローラ（Guillermo Lora）の『ボリビア労働運動の歴史、1967～1970年（*Historia del movimiento obrero boliviana*）』（1967～1970年）などがそれである。汎アフリカ主義の影響も大きかった。例えば移民史研究における国境文化とトランスナショナル・アイデンティティーの発見<sup>\*\*</sup>や、抵抗運動やストライキの国境を越えた波及などがそれである。

(4) 私は次の論文のなかで、比較労働史について概観してみた。“A Bibliography of Comparative Labour History,” in *Australian Labour and Regional Change: Essays in Honour of R. A. Gollan*, eds., Jim Hagan and Andrew Wells (Rushcutters Bay, NSW [Australia], 1998), 117-45.

(5) これらのプロジェクトでは、最初のうちは共通点や相違点を強調したが、その理由を十分に明らかにしない傾向があった。回数を重ねるうち、理由を説明することに力点が置かれるようになった。主なプロジェクトは次の2つである。Sam Davies, et al., eds., *Dock Workers 1790-1970*. International Explorations in Comparative Labour History, 2 volumes (Aldershot, 2000); and Lex Heerma van Voss, eds., *The Ashgate Companion to the History of Textile Workers, 1650-2000* (Aldershot, 2010).

IISH以外にも、国際比較の試みが行なわれている。比較される国々は、およそ6ないし12か国である。例えば次のような文献がある。Dick Geary, ed., *Labour and Socialist Movements in Europe before 1914* (Oxford, 1989); Stefan Berger and David Broughton, eds., *The Force of Labour: The Western European Labour Movement and the Working Class in the Twentieth Century* (Oxford and Washington, 1995); Ulla Wikander et al., eds., *Protecting Women: Labor Legislation in Europe, the United States, and Australia, 1880-1920* (Urbana, IL, 1995); and Patrick Pasture and Johan Verberckmoes, eds., *Working-Class Internationalism and the Appeal of National Identity: Historical Debates and Current Perspectives* (Oxford and New York, 1998).

\* Global South, アジア, アフリカ, ラテンアメリカなど南の発展途上国。

(6) 第二次世界大戦以前にも、グローバル・サウスにおける労働史について、書物が出版されている。ジュネーヴにある国際労働機関の職員ラジャニ・カンタ・ダス（Rajani Kanta Das）は、同じ年に3冊の研究書を出した。*Factory Labor in India* (Berlin, 1923); *Factory Legislation in India* (Berlin, 1923); and *Labor Movement in India* (Berlin, 1923). 合衆国の歴史家マージョリー・ルース・クラーク（Marjorie Ruth Clark）は *Organized Labor in Mexico* (New York, 1973 [originally 1934]) を出版した。

\*\* 移民についての歴史研究は、故国の文化をもった人びとが移住先の文化とは隔離された居住地（ethnic enclave）を形成すると理解される傾向があった。例えばイタリアからニューヨークに移住してイタリア人街に集住するといった事例である。しかし、国境を越えて隣国に移住する場合には、国境線をはさんで地域的な文化が形成され、一国文化を超えたアイデンティティーが形成される場合がある。

1990年代はじめにはワールド・ヒストリー（まもなく「グローバル・ヒストリー」と呼ばれるようになる）に対する学術的な関心が増大した。その背景としては、東欧諸国やソ連など「実在する社会主義」の崩壊が大きかったと思われる。というのも、それによって労働史・労働者階級史の研究方法を再吟味する必要がある人びとがますます増えたからである。これは北大西洋地域においてもそうであった。そこで、同僚のヤン・ルカッセン（Jan Lucassen）と私は、1999年に『グローバル・レイバー・ヒストリー序説』という小冊子を刊行し、GLH（グローバル・レイバー・ヒストリー）の考えを世に問うた。『序説』はそれまでの労働史が地理的、時期的、そしてテーマ的な限界をもっていると指摘した。そして、「これまで労働史家が見落としてきたことを積極的に取り上げるための」新しいアプローチが必要だと主張した。『序説』はとりわけ、大陸をまたいだ通時的な比較が必要だと論じ、それぞれ重なり合う4つの研究領域を提示した。すなわち①団体史（労働組合史など）を新たな視点から書き換えること、②これまでの研究からは抜け落ちていた団体（共済組合、消費者生活協同組合など）を研究すること、③グローバル・サウスにおける労働者階級の歴史を研究すること、そして④工業化以前の労働者の歴史を研究することである。

あれから13年も経ったので、『序説』の内容はいくつもの点で古くなっている。この論文が収録されている『国際労働史・労働者階級史研究』記念号に寄せられた諸論文が明らかに示しているように、GLHに寄せられる期待はますます大きくなっている。多くの学会において、また多数の出版物において、この考え方が取り上げられている。まだ数は多くないとはいえ、ますます多くの研究プロジェクトが世界中で展開されている。以下に例を挙げるので、その息吹を感じ取ってほしい。

■すでに2005年には、インド労働史学会（Association of Indian Labour Historians）が『グローバル・レイバー・ヒストリーに向けて——新たな比較研究』と題する国際会議を開いた。そこで報告されたペーパーの一部は2009年に書物として刊行された<sup>(7)</sup>。

■2006年9月、ITHの総会が政策文書を採択した。この文書は、「ITHはグローバル・レイバー・ヒストリー、すなわち賃労働者、奴隷、分益小作農、そしてその組織やそれに連帯する社会運動のグローバル・ヒストリーに焦点を当てる」と述べた<sup>(8)</sup>。

■2008年6月、トロント大学（ニュー・カレッジ）が大学院生を対象としてグローバル・レイバー・ヒストリー国際サマースクールを開催した。

■2008年にはまた、ヨハネスバーグのウィットウォーターズランド大学が、ブラジル、アフリカ、そしてインドの労働史家を集めて、「レイバー・クロッシングズ——世界、労働、そして歴史」という研究集会を開いた。

■ブラジルの労働史研究ネットワーク「労働世界（*Revista Mundos do Trabalho*）」は、2009年の電子ジャーナル創刊号で、GLHの重要性を説く「労働史——旧・新そしてグローバル」という

(7) Marcel van der Linden and Prabhu Mohapatra, eds., *Labour Matters: Towards Global Histories* (New Delhi, 2009).

(8) 次のサイトを参照のこと。[http://www.ith.or.at/ith\\_e/vorschlaege\\_ZuKO\\_e.htm](http://www.ith.or.at/ith_e/vorschlaege_ZuKO_e.htm) (accessed October 15, 2012).

論文を掲載した<sup>(9)</sup>。

■ベルリンのフンボルト大学は2009年に「グローバル・ヒストリーにおける労働とライフ・サイクル（Work and Human Life Cycle in Global History）」という国際研究センターを開設した。この機関は毎年、さまざまな専門分野のGLH研究者たちを上級および下級フェローとして招いている。

■ドイツ語圏で社会史を教える教授たちが半年ごとに集う「現代社会史ワーキンググループ（Arbeitskreis Moderne Sozialgeschichte）」は、2010年と2011年にGLHに関する討論を組織した。

■2011年はじめに新リスボン大学で「20世紀のストライキと社会紛争」と題する大きな会議が開かれた。これが契機となり、社会紛争の歴史についてのグローバルな研究が組織されることになり、また審査付きの電子ジャーナルがブラジルのカンピナス（Campinas）で刊行されることになった。

■イタリアの『過去と現在（*Passato e Presente*）』誌は、最近、GLHに関する活動とその国際的反響について、力のこもった学界展望を掲載した<sup>(10)</sup>。またGLHについてのイタリア語の論集が今年出版される<sup>(11)</sup>。

■フランスの『社会運動（*Le Mouvement Social*）』誌は、2012年の末に、GLHの特集号を刊行する。

これらの展開は、言うまでもなく、職業歴史家が最も多い合衆国に影響を与えずにはいなかった。この国ではかなり早くからグローバル・ヒストリーの研究が行なわれていたとはいえ、その多くは南北アメリカの歴史を対象としていた。『レイバー・ヒストリー（*Labor History*）』誌は、2002年から世界各地の労働史を扱う論文を載せるようになった。新たに創刊された『労働——南北アメリカ労働者階級史研究（*Labor : Studies in Working-Class History of the Americas*）』誌は、『レイバー・ヒストリー』誌のなかから2004年に誕生したのだが、カナダやラテンアメリカからも編集者を指名した。『労働』誌に集う人びとは、「労働者、国民国家そしてその彼方へ（Workers, the Nation-State, and Beyond）」と題する国際会議を、「南北アメリカの労働史（Labor History across the Americas）」というテーマを立てて開催した（2008年、シカゴ）。参加者たちは主に方法論や理論について議論し、重要な研究領域を切り拓いた。軍隊での労働や、[オーストラリアのアボリジニのような]現地人による労働、看護労働、外国からの労働力調達および移民制限、そして——例えば逃亡奴隷と船乗りとの——国境を越えた連帯行動などを取り上げたのである<sup>(12)</sup>。

(9) Marcel van der Linden, “História do Trabalho : o velho, o novo e o global” *Revista Mundos do Trabalho*, 1 (2009), 11-26. また次のサイトも参照されたい。 <http://www.periodicos.ufsc.br/index.php/mundosdotrabalho/issue/view/1130> (accessed October 15, 2012).

(10) Christian de Vito, “La proposta della Global labour history nell’era della ‘globalizzazione’,” *Passato e Presente*, No.85 (January – April 2012), 177-188.

(11) Christian de Vito (ed.), *Global Labour History. La storia del lavoro al tempo della globalizzazione*, Verona, 2012.

(12) そのうちの何本かは次の書物に収録されている。Leon Fink, ed., *Workers Across the Americas : The Transnational Turn in Labor History* (New York, 2011).



## 2 グローバル・レイバー・ヒストリーとは何か

GLHへの関心が高まってきた反面、その概念については曖昧なままである。ヤン・ルカッセンも私も、最初のうちは明瞭で説得的な定義は行なわなかった。私の知るかぎり、他の人びともそうだった。それは避けられなかった。やはり、詩人は詩をつくるまでは美について語らないし、ダンサーは踊る前には歌わないものなのだ<sup>(13)</sup>。だがいまやGLHの**実践**がはじまりつつあるのだから、研究目的や新しいアプローチの手法についてやや正確な定義を行なったほうが良いだろう。

ひとつははっきりさせておこう。私はGLHが、美術史や言語学のような、明確な学問領域だと考えている。この学問領域のなかで、カール・マルクスであろうと、マックス・ヴェーバーであろうと、ジョン・コモンズであろうと、どんな思想家のものであれ、さまざまな理論が構築され試される。思うに、GLHそのものは自立した「理論」のことではない。したがって、イマニュエル・ウォラーステインの世界システム論に取って代わるような、資本主義世界秩序についての解釈ではない。ということはつまり、この研究領域が論じる次元もその輪郭も、われわれが決めなければならないのだ。

### A. いつから歴史が「グローバル」になったのだろうか

この30～40年来、歴史家たちには国民国家の境界を相対化する理由があった。国民国家はせいぜい2世紀ほどの歴史しかないのに、国民国家的思考はわれわれを深く制約している。他の多くの分野の歴史家たちと同じように、労働史家もまた、国民国家がものごとを考察する自明の枠組みだと考えてきた。労働史家たちは当然のごとく、「アメリカ」「イタリア」あるいは「ロシア」の労働運動を考察してきたのである。それはまるで、労働運動がはじめから地理的・政治的な容器に仕分けられていたかのようである。もちろん、このような方法で扱うのが難しい事例もあった。例えば（オスマン帝国、ハプスブルク帝国などの）多民族国家や、（スコットランド人、カタロニア人など）自らの国家をもたない民族集団の運動がそれである。けれども、これらの事例にしても、通説を成り立たせる例外として処理されてきた。つまり、これらの運動は、それぞれの民族はそれぞれの国家をもつという、あらかじめ定められた結論に回収される、多かれ少なかれ不完全なプロセスだと理解されたのである。

それぞれの国民国家の間の違いについて比較分析が進むにつれ、とりわけ1970年代以降、方法的ナショナリズムに対する疑念が深まっていった。とはいえ、比較分析が国民国家パラダイムを崩壊させることは決してなかった。というのも、比較分析を改良しようとする試みはすべて、一つひとつの国民国家を独立した閉鎖的な「モノド」(G.W. ライプニッツ)と捉えるという前提には手を付けなかったからである。この方法的ナショナリズムはやがて変容し、以前のような硬直的な態度を暗に批判する試みが現われはじめた。[他方] グローバル・サウスにおいて、歴史家たちは早く

---

(13) Arthur Schopenhauer, *Die Welt als Wille und Vorstellung*, Part II, Ch. 12 (Leipzig: Brockhaus, 1859).  
(ショーペンハウアー著、斎藤忍随他訳『意志と表象としての世界』白水社、2004年)。

から、国を独立した単位として分析することが不可能であると理解していた。例えばナイジェリアやヴェトナムやインドネシアなどについて、宗主国であるイギリスやフランスやオランダなどとの関係を常に考慮せずに、労働者階級の歴史を分析することは可能だろうか。また、奴隷（そして奴隷貿易）やクーリーの労働関係を取り上げずに、これらの国々の賃労働者の歴史を描くことは可能だろうか。政治的理由で殺されたガイアナの歴史家ウォルター・ロドネーは、この分野のバイオニアであった。ロドネーの書物の重要性はいくら強調しても足りない。彼の作品は奴隷貿易が西アフリカにどのような影響を与えたかを明らかにしただけではなく、ガイアナの働く人びとの歴史が奴隷貿易からどのような影響を受けているかを明らかにした。こうしてロドネーは、[アフリカ]大陸と[南北アメリカ]大陸をつなぐ、まったく新しい視角を切り拓いたのである<sup>(14)</sup>。グローバル・ノースにおいては、とりわけ世界システム論の支持者たちが、大陸をまたぐさまざまな搾取様式の考察などに取り組んだ<sup>(15)</sup>。

「モノドロジー」についての批判的検討が進むにつれ、どのような用語を用いるべきかについて、議論が高まった。例えばフランスでは交差の歴史 (*histoire croisée*) が提案された。これは国家、文明、地域などの相互関係を、影響や受容のメカニズムに力点を置きつつ、考察しようとするものであった<sup>(16)</sup>。英語圏では絡み合う歴史 (*entangled history*) という考えが導入された。これも相互関係に注目するものだ。これら2つの研究動向にも増して、トランスナショナル・ヒストリーという考え方に注目が集まっている。しかしながらこの考え方は、国民国家を自明の出発点としたうえでそれを乗り越えようとするものであって、相互関係の複雑さに目を閉ざした国際比較に陥りがちである<sup>(17)</sup>。これら3つの概念は、遠く隔たった地域どうしの連関を取り扱えるとはいえ、（常にそうだというわけではないものの）多くの場合は隣接した地域に適用されている。ワールド・ヒストリーという概念も解決策となるかもしれない。ただし、ヨーロッパでXが、中国でYが、そしてアメリカでZがこのとき起こった、というような跡付け的なものでは（ほとんどまったく）役に立たない。グローバル・ヒストリーは、重要なところでワールド・ヒストリーと重なる面が多いけれども、地球上の各地域が相互に関連している点に注目するところが優っている。とはいえ、この概念にも短所はある。グローバル・ヒストリーという言葉からは、例えば「ケネス・ポメランツの言う」中国とヨーロッパの「大分岐」とか世界大戦と覇権国といった類の「ビッグ・ヒストリー」が連想されがちなのである\*。[以上のように] どの用語にも一長一短がある。

グローバル・ヒストリーについて語るとき、それが何を意味し、何を意味しないかを明らかにす

(14) Walter Rodney, *A History of the Upper Guinea Coast* (City, 1970); Rodney, *A History of the Guyanese Working People, 1881-1905* (Baltimore, 1981). [これらの書物について翻訳はないが、Rodney, *How Europe Underdeveloped Africa* (原著 1972 年) が北沢正雄によって『世界資本主義とアフリカ——ヨーロッパはいかにアフリカを低開発したか』(柘植書房, 1978 年) として翻訳されている。]

(15) より詳しくは、拙著の第13章をご覧いただきたい。Workers of the World (Leiden, 2008), 287-318.

(16) Michael Werner and Bénédicte Zimmermann, eds., *De la comparaison à l'histoire croisée* (Paris, 2004); Michael Werner and Benedicte Zimmermann, "Beyond Comparison: Histoire Croisée and the Challenge of Reflexivity," *History and Theory*, 45 (2006): 30-50.

(17) 私も次の著作でこれを試みた。Transnational Labour History: Explorations (Aldershot, 2003).

\* ケネス・ポメランツ著、川北稔監訳『大分岐——中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成』(名古屋大学出版会, 2015 年) を念頭に置いた文章と思われる。



ることが重要である。私がグローバル・ヒストリーという言葉で考えているのは、なによりも、世界のさまざまな地域の間で強まっている（あるいは弱まっている）連関——つまり相互関係や影響や移転——を、それに作用する経済的・政治的・社会的・文化的ネットワークや制度やメディアとの関連で、記述し説明することである。この研究方法（historiography）は「世界の均一化という意味での」グローバリゼーションの歴史研究（historiography）よりも視野がはるかに広い。ただし、この言葉を思いきり広くとるならば、それもまたグローバリゼーションの歴史研究だと言えよう。比較研究、つまり結合された不均等な発展を考察する研究は、その重要な構成部分となる。

この意味でグローバル・ヒストリーは必ずしも大規模なものを扱う必要はない。マイクロヒストリーも含まれる。村のグローバル・ヒストリー、作業現場のグローバル・ヒストリー、家族のグローバル・ヒストリーもありうるわけだ。その際に重要なことは、政治、地理、時期、領域、研究分野を横断して、自らの研究テーマをひたすら追求することである。移住パターン、マス・メディア、世界市場と巨大企業、宗教的支配関係、気候変動、戦争などの現象は世界をまたいでいる。明らかにしようとする相互関係や因果関係を知るためには、それほど遠くまで旅する必要がないかもしれないし、あるいは遠くまで行かなければならないかもしれない。

もちろん、遠隔地貿易のみによってようやく外部とつながっている、孤絶した場所に住んでいる集団もある。グローバル・ヒストリーは「あらゆるものごとの歴史」ではないとはいえ、このような集団もまた、外部との交流や交易が問題であれば、考察の対象となる。細部を明らかにすることによって全体を明らかにすること（そして逆にマクロな歴史過程のなかにミクロの現実を発見すること）、これこそがグローバル・ヒストリーなのだ。したがってグローバル・ヒストリーは何よりも思考方法（a question of mentality）である。研究者は大胆に研究を推し進め、これまで住み慣れた研究領域から越境しなければならないのである。

## B. どのような時期を選ぶか

労働の歴史を世界的なスケールで描こうとするとき、2種類のアプローチをとることができる。ひとつは「労働の普遍史」であって、世界のあらゆる地域における労働関係をできるかぎり包括的に比較するというものである。もうひとつのアプローチは、労働関係や労働運動を、「グローバル化した」経済という特定の視点から考察するというものである。とはいえ、これら2つのアプローチは必ずしも別々のものとする必要はない。ウィレム・ファン・シェンデル（Willem van Schendel）はこう言っている。第1のアプローチは「ダイナミックで重要な研究分野」となりうる。というのも、「働く人びとの歴史とアイデンティティを、[グローバル・] ノースの視点を越えたさまざまな理論的観点から考察することができるからである」。「第2のアプローチ（「労働という側面から見た資本主義の分析」）は、「この広大な研究領域のなかのひとつの興味深い領域」と考えられる。これもまたさまざまな理論的視角から考察することができる<sup>(18)</sup>。私もこの考えに賛成

(18) Willem van Schendel, "Stretching Labour Historiography," *International Review of Social History*, 51 (2006): 260-61.

したい。ただし、（より焦点を絞った）第2のアプローチのほうを当面は優先すべきだと考える。その理由は実践的かつ政治的なものである。

実践的というのは、旧労働史にしても新労働史にしても、資本主義社会における労働に焦点を当ててきたからである。当然のことながら GLH もこの問題関心を引き継ぐ。政治的というのは、第2のアプローチは世界を理解する手助けをし、現在の社会の動向を理解するのを助けてくれるからである<sup>(19)</sup>。もっとも、こう言ったからといって、第1のアプローチの重要性が減じるわけではない。GLH が資本主義文明を超えたより広い視点に立つならば、資本主義的發展の特殊性（あるいは非特殊性）をより深く理解できるだろう<sup>(20)</sup>。

### C. 「労働」という言葉は何を指すか

労働史・労働者階級史は長い間「賃労働者の歴史」だと理解されてきた。つまり、自由な個人であって、労働力を自らの商品として処理することができ、そしてこの商品以外に販売する物をもたない労働者の歴史と理解されてきたのである<sup>(21)</sup>。こうして鉱山労働者、工場労働者、運輸労働者、そしてある程度は農業労働者に、もっぱら焦点が当てられてきた。[だが] 研究領域の「グローバル化」にともない、[労働者] 概念をこのように狭く捉えることに対して、疑義が唱えられるようになった。

他方、現在のグローバル・サウスで生じていることから、「古典的な」賃労働者とそれ以外の従属的グループとの境界が曖昧であることが明らかになった。グローバル・サウスの多くの国々においては「純粋の」賃労働者は少数派である。階級形成が徹底しない場合が多いのである。賃労働者の大半は、例えば債務に縛られていて、自らの労働力を自由に処分するなどできない。あるいは使用者との間で正式の（法的に認められた）契約関係を結んでいない。また [グローバル・] サウスの賃金労働（wage labor）は、世帯や家族単位で行なわれる生存維持労働（subsistence labor）であり、すべてではないにしても大部分が女性たちによって行なわれ、そして市場向けの商品を自分たちで生産している。それぞれの家族構成員の経済的役割は固定せず、持続的ではないことが多く、社会関係は一時的である。現在の収入源はすぐに別の収入源に取って代わられる。このことがひとつの理由となって、労働者といわゆるルンペン・プロレタリアート——物乞い、犯罪、売春な

(19) ブルース・マズリッシュ（Bruce Mazlish）は次のように的確に書いている。「過去を見る視点が現在の出来事に根ざしているという意味で、あらゆる歴史は現在の歴史（contemporary history）である。その意味で言うと、グローバル・ヒストリーは、過去の出来事はもちろんだが、現在の出来事をより強く意識していると言えるだろう。どんな歴史叙述もそうだが、どのようにテーマを選ぶか、またどのような史料を用いるかが重要である。」Mazlish, "Introduction to Global History," in Bruce Mazlish and Ralph Buultjens, eds., *Conceptualizing Global History* (Boulder, 1993), 3.

(20) 私はソ連や中華人民共和国などの「社会主義」社会が広義の資本主義文明の内部にあると考えている。私見では、これらの国々は「資本主義国」ではないものの、その盛衰は世界資本主義のなかで展開するものでしかない。私は資本主義について、次の書物の第16章で定義した。 *Workers of the World* (Leiden, 2008)。また、ソ連型社会についての見解は次の書物で述べた。 *Western Marxism and the Soviet Union* (Leiden, 2007)。

(21) Marx, *Capital*, Vol. I (Harmondsworth, 1976), 272. (カール・マルクス著、岡崎次郎訳『資本論（1）』大月書店、1972年、296-297頁)。

どによって生きる人びと——とを区別することは必ずしも容易ではない<sup>(22)</sup>。しかも、小作人が労働を提供し地主が土地と生産手段を提供して一定の方式で収益を分け合う分益小作制〔シェアクロPPER制〕のような、隠された賃金労働 (hidden wage labor) がいろいろある。また個人事業主 (self-employed workers) のような「隠された」賃金労働をしている者もいる。彼らは形式的には部下を持たない使用者であるが、実際には特定の顧客すなわち実質的な使用者に従属していることが多い\*。

他方、動産奴隷や農奴など自由でないサバルタン\*\* (unfree subaltern) と、「自由な」賃金稼得者との境界は意外に曖昧であることが、歴史研究から明らかになってきた。例えば 1900 年頃のアフリカ東海岸では、多くの奴隷がおり、……

「自営の職人ないし熟練労働者のなかに、以前は日雇労働者であったが自分で技能を身につけて良い仕事に就く者がいた。彼らは、船長、猟師、狩人、船員、船頭、縄職人、菓子職人、仕立屋、靴屋、陶工、莫莖職人、木彫師、織物師、椰子樹液採集人、大工、船大工、金属加工職人、煉瓦職人、石灰製造職人、石工、そして銀細工師として働く者までいた。また隊商に参加して、荷物運びや小商人や遍歴職人、あるいは少数であるが隊商のリーダーやガイドになる者すらいた。最後に、プロの傭兵もいた。自営の奴隷は、彼らのもつ知識ゆえにリスペクトされ、市場に出されれば高値がついたが、売りに出されることは減多になかった。彼らは奴隷から自由になった人びと (freed slave) とほとんど同じ地位にあって、小さな畑を実質的に所有し、奴隷を所有することさえあった<sup>(23)</sup>。」

ブラジルの歴史家たちは、[所有者以外に貸し出されて働き] 賃金を得たうえでその一部を所有者に手渡す賃貸奴隷 (slaves for hire ; *ganhadores*) の事例を研究して、「自由な」賃金労働者と動産奴隷との分割線が曖昧であることを明らかにした<sup>(24)</sup>。南アジアでも同じように曖昧な事例が見られる。南アジアにおける年季奉公労働者 (クーリー) がそうである。そしてクーリーはカリブ海や

---

(22) アフリカについてヴィック・アレン (Vic Allen) は 40 年ほど前に次のように書いている。「労働者階級の圧倒的多数が生存維持に追われている社会では、また男や女や子供がそれまでのとは別の生活の糧を求めざるをえない社会では、ルンペン・プロレタリアートとそれ以外の労働者階級とを区別するのがほとんど不可能である。」V. L. Allen, "The Meaning of the Working Class in Africa," *Journal of Modern African Studies*, 10 (1972) : 169-89, 引 188.

\* 著者はここで、バイク便のライダーや、ウーバー社を「実質的な使用者」にしている運転手など、業務委託契約を結んで働く人びとを指していると思われる。

\*\* 著者は『世界の労働者』のなかで、subaltern classes について次のように述べている。「資本家と地主の他に、正統マルクス主義は資本主義に 5 つのサバルタン階級ないし準階級 (semi-classes) があるとしている。すなわち……自由な労働者、……小ブルジョアジー、……自営業者、……奴隷、そして……ルンペン・プロレタリアートである」(Linden, *Workers of the World*, p.20)。この引用からも明らかのように、この論文では「サバルタン」という用語が、資本主義社会における「従属的階級」という意味で用いられている。

(23) Jan-Georg Deutsch, *Emancipation without Abolition in German East Africa c.1884-1914* (Oxford, 2006), 71-72.

(24) 次の論文がこの領域を切り拓いた。Silvia Hunold Lata, "Escravidão, cidadania e história do trabalho no Brasil," *Projeto História*, 16 (1998) : 25-38. また次の重要なケーススタディーも参照されたい。João José Reis, "'The Revolution of the Ganhadores': Urban Labour, Ethnicity and the African Strike of 1857 in Bahia, Brazil," *Journal of Latin American Studies*, 29 (1997) : 355-93.

マラヤや〔ブラジル北東部の〕ナタールやフィジーなどにも存在した。クーリーたちの境遇は、いわば「新種の奴隷制」と呼ぶべき場合もあり、また「ほとんど自由な」賃金労働である場合もある<sup>(25)</sup>。オーストラリアでは、長い間迷った後、いまや労働史研究者たちは、この国に最初に住みついた数多くの囚人労働者を、強制的に働かされたにもかかわらず、広義の「労働者階級」だと躊躇なく考えるようになった<sup>(26)</sup>。またヨーロッパにおいても研究が進み、19世紀になっても、いわゆる「自由な」労働者の多くが実際には**債務労働者**であったことが明らかになってきた。主従法や徒弟制度などによって、労働者は使用者に緊縛され、従来の文献から理解されていたよりもかなり狭い法的権利しかもっていなかったのである。この研究動向のなかから、「産業農奴制（industrial serfdom）」という言葉すら提唱されるようになっていく<sup>(27)</sup>。

さらに事情を複雑にしているのは、これまで用いられてきた概念が不適切になってきたことである。というのも、「働いていない」ことになっている人たちがそこから排除されてきたからだ。従来の解釈はろくに説明もせず特定の道徳的基準を押しつけてきた、という批判が現われている。例えば廃品回収業や売春や物乞いなど極めて不安定な活動によって生活している人びとを指すのに、**ルンペン・プロレタリアート**という言葉が用いられてきた。これらの活動は「労働」だとは考えられてこなかったのだ。しかしこの解釈には特定の道徳的バイアスがかかっている。よく考えてみると、廃品回収業者や売春婦や乞食は、実際のところ賃労働者であり年季奉公労働者であり動産奴隷なのである<sup>(28)</sup>。

この他にも、警官や兵士など、国家の手先となって弾圧に従事したり暴力をふるったりしている人びとがいる。労働史研究者たちは彼らの歴史を長いこと無視してきた。**傭兵（mercenary）**という言葉は、もともとラテン語の *merx* つまり商品という言葉から来ている。これは働きに対して金銭が支払われる者という意味である。警官の仕事は、他の賃労働者と同じように、組織に組み込まれており、テイラー化されている<sup>(29)</sup>。だから、もうそろそろ道徳家のふりは止して、これら「危険な階級」をそれぞれの文脈に位置づけ、正当な研究分野とすべきなのである。そのためには、仕事というものについて、よりいっそう中立的な定義を試みる必要がある。例えば、労働とは**有用な**

(25) Hugh Tynker, *A New System of Slavery: The Export of India Labour Overseas, 1830-1920* (London, 1974).

(26) 次の論文が見事なサーヴェイを行なっている。David Andrew Roberts, "The 'Knotted Hands that Set Us High': Labour History and the Study of Convict Australia," *Labour History* [Sydney], 100 (2011): 33-50.

(27) 次の論文を参照されたい。Alan McKinlay, "From Industrial Serf to Wage-Labourer: The 1937 Apprentice Revolt in Britain," *International Review of Social History*, 31 (1986): 1-18. 比較史研究として次のものがある。Robert J. Steinfeld, *The Invention of Free Labor: The Employment Relation in English and American Law and Culture, 1350-1870* (Chapel Hill, 1991); Douglas Hay and Paul Craven, eds., *Master, Servants, and Magistrates in Britain and the Empire, 1562-1955* (Chapel Hill, 2004); Alessandro Stanziani, ed., *Le travail contraint en Asie et en Europe: XVII-XXe siècles* (Paris, 2010).

(28) 次の論文を参照されたい。J. Mark Ramseyer, "Indentured Prostitution in Imperial Japan: Credible Commitments in the Commercial Sex Industry," *Journal of Law, Economics, and Organization*, 7 (1991): 89-116; Alain Faure, "Sordid Class, Dangerous Class? Observations on Parisian Ragpickers and Their *Cités* During the Nineteenth Century," in Shahid Amin and Marcel van der Linden, eds., *"Peripheral" Labour? Studies in the History of Partial Proletarianization* (Cambridge, 1996), 157-76.

(29) Clive Emsley, "The Policeman as Worker: A Comparative Survey, c. 1800-1940," *International Review of Social History*, 45 (2000): 89-110.



物やサービスの目的意識的生産である、と定義することができよう<sup>(30)</sup>。このように定義する場合に、2つのことが強調されている。ひとつは目的を立てた行為であること、もうひとつは人びとに有用な物やサービスを創り出すということである。もちろん有用性とは主観的なものである。ある人びとにとってまったく無用のものが、他の人びとにとってたいへん有用なものであることがある。例えば、戦争という行為が労働過程だと強調されても、多くの人びとはこれが「有用な活動」などとは思っていないだろう。

このように「労働に関する」研究領域を拡張すると、そこからさまざまなことが考えられる。私は思うのだが、アプローチを広くとれば、さまざまな分野で労働の歴史を研究している人びとの間で交流がずっと活発になるのではないだろうか。第1に、さまざまな地域を対象とする労働史研究者がこれまで以上に交流を深めるべきであろう。第2に、賃金労働を研究している労働史家と、奴隷制や年季奉公や小作制度を研究している労働史家とが連携することが、望まれる。これによって研究が活性化するのは、とりわけ（インドやブラジルや南アフリカなど）グローバル・サウスに属する地域であろう。とはいえそれ以外の地域にとっても意味があるはずだ。第3に、経済史、家族史、女性史、法制史、地域研究などの分野で互いに交流が進むだろう。第4に、（人類学者、社会学者、政治学者、地理学者など）社会科学者との協働を推し進めるべきである。伝統的な労働史においても、そのような協働は行なわれてきた。それをさらに推し進めるのである。例えば人類学者は、非資本主義社会の資本主義世界経済への統合について、重要な知見をもたらしてくれるだろう。

これらのギャップを埋めるのは大きな知的冒険である。例えば奴隷制の歴史を研究する人びとは、労働史家にはあまりなじみのない『奴隷制と反奴隷制』といった優れた雑誌を刊行し、労働史の他の分野とは別の、かなり大きなコミュニティをつくっている。また逆のことも言える。奴隷制を研究する人びとは賃金労働の歴史にあまり関心がない。そして『労働史・労働者階級史研究 (ILWCH)』や『社会史国際雑誌 (International Review of Social History)』などはめったに読まない。奴隷労働と賃金労働の歴史家たちの協働が進んだのは、主にアフリカとブラジルである。彼らの営みは近年になって、徐々に他の地域の歴史家たちの関心を惹くようになっていく<sup>(31)</sup>。グローバル・レイバー・ヒストリーを成功に導くためには、このような交流がさらに必要である。

(30) この定義は次の文献と実質的に同じである。Charles and Chris Tilly, "Work includes any human effort adding use value to goods and services," in Charles Tilly and Chris Tilly, *Work Under Capitalism* (Boulder, CO, 1998), 22. 私はマルクスの「使用価値」概念をこの文脈では用いないでおく。というのも、使用価値は交換価値すなわち価格の対概念であって、商品化された労働にしか適用されないものとなるからである。

(31) イギリスのノッティンガム大学の歴史学教授ディック・ガーリー (Dick Geary) は, "Labour in Slave and Non-Slave Societies: Brazil and Europe in the 18th and 19th Centuries" をテーマとする, 通称リーヴァヒウム調査交流 (Leverhulme Research Interchange) を 2002 年に創始した。このプロジェクトの目的は, テーマを決めて労働史家と奴隷史家との対話を行なうことである。そのひとつの成果として次の書物がある。Douglas Cole Libby and Júnia Ferreira Furtado, eds., *Trabalho livre, trabalho escravo: Brasil e Europa, séculos XVIII e XIX* (São Paulo, 2006)。



### 3 何が達成され、何をするべきか

グローバル・レイバー・ヒストリーは明らかに広大な研究領域であって、そこから無尽蔵の研究テーマが生まれてくるだろう。また、あらゆる労働史研究者が従わなければならない「客観的」方法論なるものは存在しない。以下では研究の方向性について私見を披露する。ただし次のことをあらかじめ述べておきたい。これから取り上げるトピック以外のテーマこそ喫緊の課題であり重要であると考えている歴史家がおられることを、私は承知している。それでも構わないのだ。それどころか、われわれは互いに補い合うことができるはずである。

#### A. 労働者階級という概念を再考する

新たに生まれつつある研究者間のグローバルなネットワークやそれにもとづく討議から見えてきたことがある。それは、労働者階級という概念を、排除の論理ではなくむしろ包摂の論理によって、再検討する必要があるということだ。この理論的課題を提起したのは、とりわけマルクス主義に立つ歴史家たちである。マルクス自身は、動産奴隷制が「ブルジョア的体制 (bourgeois system) そのものに逆らう変則 (Anomaly)」であって、「ブルジョア的体制の内部で、時とところによっては存在しうる」ものの、「他の地点には存在しない」ものであると考えていた<sup>(32)</sup>。しかしながら近年になって、マルクス主義の歴史家たちはこのような定義の再検討に向けて、2つの論点を提出している。

第1に、ジャイラス・バナジ (Jairus Banaji) とラケシュ・バンダリ (Rakesh Bhandari) は、「変則」というマルクスの考えを否定して、資本主義のもとでの (不自由労働を含む) あらゆる労働の形態を「資本のもとでの」労働 (“capital-positing” labor) の亜種 (variations) と捉えるべきだと主張した。

このアプローチは、動産奴隷や分益小作農や賃労働者が、経済的強制のもとであれ経済外的強制のもとであれ、いずれも資本に奉仕しているわけだから、それぞれの違いは質的なものではなく程度差にすぎない、と主張する。

「賃労働の本質を資本のもとでの活動 (capital-positing activity) に求めるこの見方は、[賃労働という] 概念の外延を見直して資本主義の歴史研究におけるヨーロッパ中心主義的で視野の狭い奴隷制・植民地主義研究を見直すだけでなく、どのような形態の賃労働も [資本に] 囚われたものであることを浮き彫りにする。」<sup>(33)</sup>

そして第2に、労働者階級という概念をあらゆる形態の**商品化された労働**にまで拡大しようと提

---

(32) Marx, *Grundrisse* (Harmondsworth, 1973), 464. [訳出するにあたっては、高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』(大月書店, 1961年), 第3分冊・400頁および資本論草稿集翻訳委員会訳『マルクス資本論草稿集2 (1857-58年の経済学草稿2)』(大月書店, 1993年), 106頁を参照した。]

(33) Rakesh Bhandari, “The Disguises of Wage-Labour: Juridical Illusions, Unfree Conditions and Novel Extensions,” *Historical Materialism*, 16 (2008): 71-99, 引用 96. また次の論文も参照されたい。Rakesh Bhandari, “Slavery and Wage Labor in History,” *Rethinking Marxism*, 19 (2007): 396-408; Jairus Banaji, *Theory as History: Essays on Modes of Production and Exploitation* (Leiden and Boston, 2010).

案する人びともいる。この視点に立てば、労働者階級は、（個人であれ法人であれ団体であれ）使用者に自らの労働力を売ったり貸したりする者すべてを含む。経済的強制によるものも含むし、経済外的強制によるものも含む。また、労働力の所有者が労働力を売るだけでなく貸す場合も含む。さらに、労働力の所有者が生産手段を所有する場合も含む<sup>(34)</sup>。このように概念化する狙いは、あらゆるサバルタン労働者（subaltern workers）を、労働力の強制的な商品化という、共通の階級視点から見ようとするところにある。

これら2つのアプローチによると、新たに定義された労働者階級のメンバーが共有しているものは、使用者による経済的搾取であり、また労働力の商品化である。したがって、さまざまにその姿を変えてゆく資本主義のなかで、彼らは共通の階級利害をもつのである。例えば、近年の歴史研究によって明らかになったことだが、奴隷と「自由な」賃金稼得者とが共闘したという事例がある<sup>(35)</sup>。それと同時に、この「新たに定義された広義のプロレタリアート」が共通点をほとんどもたないことも当然ありうる。

## B. 階級構成を再編成する

労働者階級が世界の各地で長期的にどう発展したかを分析することは、もちろん、大きな課題である。とはいえ、労働者階級を広く捉えたうえでそれがどう発展したかを計量的に推測する研究はまだない。これまで述べてきた広義の労働者階級（extended working class）のうち、賃労働者の部分ですら、その人数が大雑把に推論されたにすぎない<sup>(36)</sup>。19世紀と20世紀については比較的多くのデータが利用できるのだが、それ以前については、互いに比較できるよう整備されたデータセットを揃えるのは極めて難しい。

とはいうものの、「労働関係史グローバル共同研究（Global Collaboratory on the History of

---

(34) Marcel van der Linden, *Workers of the World*, 第2章。生活手段として労働力しか所有しないが、その労働力が商品化されていない人びと（つまり広い意味での失業者）は、サバルタン労働者階級（subaltern working class）の一部と考えられる。また、生計維持労働を行なったり、年齢や健康状態のために働けないサバルタン労働者の家族もそうである。

(35) 例えば次の文献がそうである。Peter Linebaugh and Marcus Rediker, *The Many-Headed Hydra*.

(36) 先行的な研究は次のとおりである。Paul Bairoch and J. M. Limbor, “Changes in the Industrial Distribution of the World Labour Force, by Region, 1880-1960,” *International Labour Review*, 98 (1968) : 311-36 ; Paul Bairoch, “Structure de la population active mondiale de 1700 à 1970,” *Annales E.S.C.*, 26 (1971) : 960-76 ; Deon Filmer, *Estimating the World at Work*, World Bank Policy Research Working Paper, No.1488 (Washington, DC : World Bank, 1995). [<http://documents.worldbank.org/curated/en/119411468780620212/Estimating-the-world-at-work> から取得できる。]

\* 「互助型労働」とは、世帯（household）ないしコミュニティー（世帯の集合）において、他のメンバーのために働くことを指す。例えば家長、その妻子、家事使用人、家内奴隷など。「貢納型労働」とは、国家などの権力（polity）に従属して働くことを指す。例えば徴兵された兵士・水兵、囚人、騎士・侍など。「商品型労働」とは、労働力ないし労働の産物が市場で交換されるもの。例えば職人・小農・小商人とその家族、使用者・奴隷所有者、賃労働者、年季奉公人、奴隷など。「非労働型」とは、労働していない、あるいは労働できないという意味で、上の3つのカテゴリーと区別される。6歳以下と75歳以上の人びと、障害者、生徒・学生、金利生活者など働かなくても良い裕福な人びと、失業者などが含まれる。[Karin Hofmeester, Jan Lucassen, Leo Lucassen, Rombert Stapel, and Richard Zijdemann, “The Global Collaboratory on the History of Labour Relations, 1500-2000 : Background, Set-Up, Taxonomy, and Applications,” 26 October 2015. 注 (37) の URL より 2017 年 5 月 18 日に取得。]

Labor Relations)」の活動が示すように、階級形成の過程を広い視点から考察する試みが行なわれてきた。これは2007年から始まったもので、6つの大陸の研究者が集まり、1500年、1650年、1800年、1900年、そして2000年という5つの時点について、世界中の労働関係を網羅しようとしている。このプロジェクトは、アムステルダム社会史国際研究所がコーディネートしている。この共同研究は、試行的なプロジェクトにおいて労働関係が18種類あることを明らかにし、それらを「互助型 (reciprocal)」, 「貢納型 (tributary)」, 「商品型 (commodified)」, そして「非労働型 (non-working)」という4つの労働類型 (types of labor) に整理した。このデータセットはまだ完全とは言えないが、暫定的な仮説によれば、19世紀はじめまでは多様な労働類型（そして多様な労働関係の組み合わせ）が存在しており、複雑さを増しつつあったと考えられる。そしてそれ以降[19世紀以後], 「ふつうの」賃金労働が支配的になったのである。今後、データを収集し検討すれば、この仮説を検証することができる<sup>(37)</sup>。その結果にもとづき、さまざまな地域や時代ごとに、労働管理の形態 (modes of labor control) を明らかにすることができるはずである<sup>(38)</sup>。

### C. さまざまな階級形成を理解する

研究者として真に「深掘り」するためには、データセットを整備するだけでなく、テーマごとに焦点を絞ってケーススタディーを行ない、国際比較する必要がある。この意味で期待できそうな研究が次々と行なわれている。世界のさまざまな地域について、たいへんな勢いで研究が進んでいるのだ。豊かな国々だけを対象としない国際比較研究が、近年、急増している。炭鉱労働者についてはすでに行なわれた。それに続いて近年は港湾労働者、繊維労働者についての大規模な研究が進められており、さらに造船労働者、煉瓦製造工、兵士、そして売春婦などの比較研究が進められようとしている<sup>(39)</sup>。

これらの研究に教えられつつ、私がとくに重要だと思うのは、さまざまな国の労働者階級の発展は互いに結びついており、しかも階級間に大きな格差が生じていることである。これを研究する方法がいくつかある。そのひとつは商品連鎖を辿ってゆくことである。商品はふつう人の手によってつくられる。ということは、自分で働くにしろ他人に雇われて働くにしろ、生産手段を用いて物をつくる人びとの努力の結晶が商品なのであって、つくられた後はその人びとないし他の人びとに

---

(37) <https://collab.iisg.nl/web/LabourRelations> このプロジェクトはヤン・ルカッセンが考えた。そして、カリン・ホフィネースターとクリスティーン・モル・ムラタによってコーディネートされ、オランダ応用科学研究機構 (Netherlands Organization for Scientific Research (NWO)) およびドイツのゲルダ・ヘンケル財団 (Gerda Henkel Foundation) の資金援助を受けた。

(38) この分野を切り拓いたのはイマニュエル・ウォーラーステインである。Immanuel Wallerstein, *Modern World System*, vols. I and II (New York, 1974 and 1980). (川北稔訳『近代世界システム1, 2』岩波書店, 1981年)。労働史研究者たちがこの作品をどう見ているのかについては、Marcel van der Linden, *Workers of the World* の第13章を参照されたい。

(39) Gerald D. Feldman and Klaus Tenfelde, eds., *Workers, Owners and Politics in Coal Mining: An International Comparison of Industrial Relations* (New York, 1990); Sam Davies et al., eds., *Dock Workers*; Heerma van Voss et al., eds., *Ashgate Companion to Textile Workers*. アムステルダム社会史国際研究所のイニシアティブによって、次のプロジェクトが行なわれた。造船 (コーディネーター Raquel Varela), 煉瓦製造 (同 Jan Lucassen), 兵士 (同 Erik-Jan Zürcher), 娼婦 (同 Lex Heerma van Voss および Magaly Rodriguez García)。

よって売ったり貸し出されたりするものだということである。とはいえ、生産手段（原料、機械設備、エネルギーなど）はそれ自体が人間労働の産物でもある。つまり、ある種の「生産物連鎖（product chain）」があって、「最終的に消費される生産物の生産過程と交換過程が枝と幹のように連なっている。原料、労働、労働力再生産に必要な物資・サービスの調達、中間工程、最終工程、運送、そして最終消費のリンケージが、現在の世界システムにおいて、世界中のほとんどの人びとを互いに結びつけている<sup>(40)</sup>」。こうして、それを享受する消費者はとくに意識していないとはいえ、この「商品連鎖という」概念は、それぞれの商品がそれ自体の歴史をもっており、物産の歴史を追跡するならば、グローバルな相互関係が明らかになり、また、別の著書で説明したように、テレコネクション（teleconnection）\*の相互関係が明らかになるということを示しているのである<sup>(41)</sup>。

商品連鎖についての研究文献は1990年代から大幅に増えた。とはいえ、ある研究が明らかにしたように、「とくに労働について、そして一般に階級関係について、実証研究を理論化するには多くの困難が伴う」のが現状である<sup>(42)</sup>。このような研究状況のなかで、ラディカル派地理学者（radical geographers）が問題の解決に取り組んでいる。商品連鎖やグローバル生産ネットワークの分析によって、連鎖のなかにいる労働者の間で団結が促進されるか、あるいは制約を受けるかについて、研究を行なうことが可能になる。早い話が、彼らの短期的な利得はさまざまである。例えば、商品連鎖の起点にいる労働者が「高価」であればあるほど、使用者は連鎖の末端にいる労働者の生活水準を押し下げようとする。

テレコネクションを分析する第2の意義は、先進資本主義国の労働者たちが低開発国や植民地の労働者からの超収奪（extra exploitation）からどのくらい利益を得ているのかという、古くからの論争を理解するのに役立つことである。この問いは、エンゲルスやレーニンが提起し、フリッツ・スターンバーグ（1926年）やアルギリ・エマニュエル（1969年）がそれぞれの形で答えてきた<sup>(43)</sup>。先進国の労働者と発展途上国の労働者との格差が拡大したことは、通説になっている。そして、この格差拡大が真の国際連帯を阻害してきたことも、極めて明らかである。それにしても、ひとつ大きな疑問が残る。中枢国の「高賃金（superwages）」は、どの程度、豊かな国と貧しい国との不等価交換の直接の結果なのだろうか。中枢国労働者の報酬は、その多くの部分が、平均生産性が高いこと、技能が高いこと、組織行動の能力（organizing ability）が高いこと、そしてその結果として達成される高い内生的経済成長（indigenous economic growth）に帰することができる。こ

---

(40) Christopher Chase-Dunn, *Global Formation : Structures of the World Economy* (Oxford and Cambridge, MA, 1989), 346.

\*テレコネクションとは、遠く離れた場所で起こる大気や海洋の変動が結び付いていて、お互いに有意な相関関係にある現象を意味する用語である。最近の地球規模での大気・海洋の大循環モデル実験で、これらの現象の物理的な機構が解明されつつある。（『ブリタニカ国際大百科事典 電子辞書対応小項目版』より。）

(41) Marcel van der Linden, *Workers of the World* (Leiden, 2008), 372-77.

(42) Ben Selwyn, "Beyond Firm-Centrism : Re-integrating Labour and Capitalism into Global Commodity Chain Analysis," *Journal of Economic Geography*, 12 (2012), 205-26, 引用 205.

(43) Fritz Sternberg, *Der Imperialismus* (Berlin, 1926) ; Arghiri Emmanuel, *L'échange inégal. Essais sur les antagonismes dans les rapports économiques internationaux* (Paris, 1969).



の点についてはさらに科学的研究を進める必要があるだろう<sup>(44)</sup>。

#### D. 相互連関を知る

広義の労働者階級（the broad working class）の国際的不平等についての研究に隣接して、世界の各地域をまたぐ移動メカニズムについての研究がある。移動はさまざまな形で起こっている。そのひとつが移民である。これまで多くの研究が行なわれてきたけれども、ヨーロッパに偏る傾向があった。19世紀の環大西洋移民の規模は、同じ時期の南アジアや東北アジアにおける移民に比べて大きくないことが、明らかになってきている。世界の各地域をつなぐもうひとつの懸け橋は運輸労働者、とりわけ多国籍の人びとからなり大陸を股にかけて航海する船乗りである<sup>(45)</sup>。近年、多くの関心が船乗りに向けられてきているのは、その意味で不思議なことではない<sup>(46)</sup>。地球を股にかけて移動する（移民や船乗りなどの）人びとだけでなく、制度や考えや物産などもまた、はるかに遠い距離を隔てて人びとに影響を与えている。その顕著な例としてイギリス政府の行動がある。この国は1807年から奴隷貿易を禁止する努力を開始した。この長期にわたる運動は、南北アメリカ大陸やアフリカから、南アジア・東南アジアに至るまで、広い範囲にわたって労働関係に大きな影響を与えた。1919年に創設された国際労働機関（ILO）は、幅広い分野で国際労働基準を制定することで、この運動を20世紀に引き継いだとも言える。とはいえ、その履行まで強制できたというわけではない<sup>(47)</sup>。他方、次の3つのことが明らかになってきた。第1に、北部大西洋以外の地域（と

(44) エドナ・ボナシチ（Edna Bonacich）らによる「分割労働市場論（split labor market theory）」を支持する人もいるかもしれない。次の明快な論考を参照されたい。Edna Bonacich, “The Past, Present, and Future of Split Labor Market Theory,” *Research in Race and Ethnic Relations*, 1 (1979) : 17-64.

(45) このトピックは次の論文によって切り拓かれた。Adam McKeown, “Global Migration, 1846-1940,” *Journal of World History*, 15 (2004) : 155-89. 次の書物はグローバル移民史をよくまとめている。Dirk Hoerder, *Cultures in Contact : World Migrations in the Second Millennium* (Durham, NC, 2002). 2005年から「グローバル移民史」プロジェクトがはじまった。これは「非西欧世界における移民の経験について全面的に考察しようとする」ものである。次のサイトを参照されたい。<http://www.iisg.nl/research/gmhp.php> (accessed October 15, 2012).

(46) 最近の業績として次のようなものがある。Gopalan Balachandran, “Circulation through Seafaring : Indian Seamen, 1890-1945,” in Claude Markovits et al., eds., *Society and Circulation : Mobile People and Itinerant Cultures in South Asia, 1750-1950* (New Delhi, 2003), 89-130 ; Jan Lucassen, “A Multinational and its Labor Force : The Dutch East India Company, 1595-1795,” *ILWCH*, 66 (2004) : 12-39 ; Michael H. Fisher, “Working Across the Seas : Indian Maritime Labourers in India, Britain, and in Between, 1600-1857,” and Ravi Ahuja, “Mobility and Containment : The Voyages of South Asian Seamen, c.1900-1960,” both in Rana Behal and Marcel van der Linden, eds., *India's Labouring Poor : Historical Studies c.1600 - c.2000* (New Delhi, 2007), 21-45, and 111-41 ; Matthias van Rossum et al., “National and International Labour Markets for Sailors in European, Atlantic and Asian Waters, 1600-1850,” *Research in Maritime History*, 43 (2010) : 47-72 ; Leon Fink, *Sweatshops at Sea : Merchant Seamen in the World's First Globalized Industry, from 1812 to the Present* (Chapel Hill, NC, 2011).

鉄道工事の労働者や鉄道労働者の歴史については、多くの国々について研究が行なわれている。さまざまな国の史料を用いて鉄道に関する労働のグローバル・ヒストリーを書くのは、興味深い仕事になるだろう。

(47) Jasmien Van Daele et al., eds., *ILO Histories : Essays on the International Labour Organization and Its Impact on the World During the Twentieth Century* (Berne, 2010) ; Isabelle Lespinet-Moret and Vincent Viet, eds., *L'Organisation internationale du travail. Origine, développement, avenir* (Rennes, 2011) ; Sandrine Kott and Joëlle Droux, eds., *Globalizing Social Rights : The ILO and Beyond* (London, 2012) ; Marcel van der Linden, ed., *Humanitarian Intervention and Changing Labor Relations : The Long-term Consequences of the Abolition of the Slave Trade* (Leiden and Boston, 2011).



りわけ植民地)において、自由でない労働者を管理するための、重要な労働管理技術 (labor-management techniques) が発明された。第2に、労働管理技術の革新は産業革命よりもはるかに昔から行なわれていた。そして第3に、労働管理技術についての新しい知識は地球上のあらゆる地域に普及していった<sup>(48)</sup>。このような国際的連関の多くは、ほとんど研究されていないけれども、そこから驚くような研究成果が生まれてくる可能性がある。

## E. 階級文化を理解するために

ヨーロッパにおいても労働者の文化的な違いは大きい。このことが労働史研究者によって実証されてきたことは言うまでもない。例えばリチャード・ビアナッキ (Richard Biernacki) は、16世紀からドイツとイギリスの賃金労働者が商品としての労働力について異なる理解をしており、その理解の違いが「言説によって生じたのではなく、仕事をつうじた管理者と労働者の関係をつうじて再生産された」ことを明らかにしている<sup>(49)</sup>。この成果を踏まえて、われわれは世界の各地における労働者階級文化の違いはさらに大きいという仮説を立てることができるだろう。とはいえ、これはいまのところまだ想定にすぎない。労働者階級文化がどのように生まれ、広がり、変化するかについて理解するためには、言うまでもなく、家族や社会関係や公式・非公式の教育によって行なわれる社会化についてよく理解しなければならない。とはいえ、社会化に関する国際比較文化研究は、まだ緒についたばかりである。民族誌や歴史や社会心理の研究者たちが協働すれば、豊かな成果が生み出されるに違いない。

もうひとつのテーマはグローバルな連関を考察すること (global awareness) である。おそらく次の例が私の言いたいことを明らかにしてくれるだろう。イギリス繊維産業における18世紀末の機械化は、イギリスの手織工をほとんど絶滅させたが、その一方で北アメリカの奴隷によって生産される木綿に対する需要を増大させた。アメリカ南北戦争が1861年から1865年にかけて起こり、[綿花輸出の減少によって]大西洋貿易が衰退した結果、ランカシャーの「綿花飢饉」を引き起こしてイギリス労働者を窮乏化させただけでなく、[その窮乏化した]労働者のオーストラリアへの移住を生み出したり、エジプトやインドなどでの綿花生産の増大をもたらしたりした。そしてエジプトやインドにおいては、綿花の商品化によって多くの農民が生存手段を奪われ、飢饉がいっそう深刻になった<sup>(50)</sup>。ごく手短かに言うならば、このような因果関係は、合衆国、イギリス、エジプト、英領インド、オーストラリアの5か国にまたがっている。その結果、少なくともこれら5か国の労働者たちはさまざまな体験をしたわけだが、これに関する史料をまとめてその全体像を描くことに

(48) Bill Cooke, "The Denial of Slavery in Management Studies," *Journal of Management Studies*, 40 (2003) : 1895-1918 ; Elizabeth Esch and David Roediger, "One Symptom of Originality : Race and the Management of Labour in the History of the United States," *Historical Materialism*, 17 (2009) : 3-43 ; Marcel van der Linden, "Re-constructing the Origins of Modern Labor Management," *Labor History*, 51 (2010) : 509-22.

(49) Richard Biernacki, *The Fabrication of Labor : Germany and Britain, 1640-1914* (Berkeley, 1995), 471.

(50) 私はローザ・ルクセンブルクに従っている。Rosa Luxemburg, "Einführung in die Nationalökonomie," in Luxemburg, *Gesammelte Werke*, vol.5 (Berlin, 1985), 524-778, 引用 557-60. 英訳がある。section IV of Rosa Luxemburg, *What is Economics?* Translated by T. Edwards (New York, 1954) ; reprinted New York, 1968, 39-44. (岡崎次郎・時永淑訳『経済学入門』岩波文庫, 1978年)。

は、まだほとんど手が付けられていない。つまり 1860 年代オーストラリア移民の記憶は、ほぼ同時期のエジプト農業の転換についての記憶とも、南北戦争期のアメリカの記憶とも、まだ結び付けられていないのである。

このことから、次のような疑問が浮かび上がってくる。どのような条件があればグローバルな連帯意識が生まれ、そしてどのような条件のもとでそのような連帯が生まれないのだろうか。例えば、（日本がロシアに勝利した）1905 年以降、なぜ労働者や農民の間で国境を越えた熱狂の波が生まれたのか、そしてそれが 1917 年（十月革命）以降、インドネシアやイランやトルコにおける社会運動や、ボルシェヴィズムに対する世界的な共感を生み出したのか。そして、広義の労働者階級（the broad working class）におけるそのようなグローバルな覚醒は、時とともに高まったのかどうか。またこの点において、周辺地域と中枢地域の間に重要な違いはあったのかなかったのか。そして、国籍、民族、ジェンダーの異なる労働者たちの間で起こった出来事を、どのように理解すればよいのか。

労働者の主体性を研究するのは、いまでも極めて困難な研究課題であるが、それを実現するひとつの方法は、「グローバルな伝記」を考察するという方法である。つまり、遠いところに行った人びとや、海を渡って遠くまで行った人びとや、政治的・文化的・宗教的な境界を越えた人びとのライフヒストリーを分析することである<sup>(51)</sup>。すでに著名な労働運動指導者やラディカルな知識人については、そのような伝記が書かれている。けれども広義の労働者階級の「ふつうの」人びとについての伝記はほとんど存在しない。オラウダ・イクイアーノ（1745 年頃～1797 年）の貴重な日記はそのひとつである。けれども、それは例外と言うべきである<sup>(52)</sup>。グローバル・レイバー・ヒストリーの研究者たちは、この困難にもめげず、研究に乗り出しつつある。例えば、24 歳でスリナムに移住したインド人クーリーのムンシ・ラーマン・カーン（Munshi Rahman Khan）（1874 年～1972 年）の回想録が、学術的な検討を経たうえで、最近出版されている。40 年以上にわたってカーンは自らの経験を記録した。その内容は、カリブ海域におけるインド人年季奉公労働者の生活と労働について、豊かな像を与えてくれる<sup>(53)</sup>。

## F. 組織化と抵抗を理解する

組織化と抵抗の諸形態についての国際比較研究が活発になってきた。ストライキや叛乱など公然たる抵抗だけでなく、頼母子講（rotating savings and credit associations）や互助会（mutual aid

(51) この箇所は次の書物の序章にもとづく。Bernd Hausberger, ed., *Globale Lebensläufe : Menschen als Akteure im weltgeschichtlichen Geschehen* (Vienna, 2006).

(52) *The Interesting Narrative of the Life of Olaudah Equiano, or Gustavus Vassa, the African*. Written by Himself (New York, 1791).

(53) Kathinka Sinha-Kerkhoff et al., eds., *Autobiography of an Indian Indentured Labourer : Munshi Rahman Khan (1874-1972)* (New Delhi, 2005). ゲッティンゲン大学のラヴィ・アフジャ（Ravi Ahuja）は、英領インドの船乗り（lascar）であったアミール・ハイダル・カーン（Amir Haider Khan (c.1901-1989)）の回想録にもとづく書物を出版しようとしている。

funds) や消費者生協などの地味な活動にも光が当てられている<sup>(54)</sup>。この分野は、相互扶助とも呼ばれるが、まだまだ研究すべきことが多い。互助組織は、おそらくその地味な性格ゆえに、伝統的な労働史から「継子」扱いされてきたというだけではない。自由でない労働者たちの互助の諸形態についてはほとんどまったく研究されていないのである。例えば、奴隷たちの間にも頼母子講は存在した可能性がある。けれども、それについてはほとんど何も知られていない。

アフリカや南北アメリカの逃亡奴隷 (*marronage of slaves*) の抵抗運動とか、ストライキといった、「自由な」労働者たちの表立った反抗の諸形態についてはよく知られている。けれども、この分野においても、グローバルなアプローチが新たな発見をもたらすと思われる。例えば、伝統的な[一国的]アプローチならば、ストライキとは自由な賃金労働者たちの団体行動の一形態であるということになるだろう。けれども、抗議が展開される仕方も、また弾圧の様式も——奴隷や自営業主やルンペン・プロリタリアートや「自由な」賃金労働者など——さまざまな種類の労働者の間で、かなり多くの共通点がありそうである。例えば奴隷もクーリーもストライキをした。また、奴隷や年季奉公労働者の場合も、ストライキが重要な抵抗手段であり、皆で働くことを拒絶する特殊な形態であることがわかる。いわゆる自由でない労働者は、ストライキ以外の抵抗手段をとるので、これについても研究が必要である。そのような手段としては、命令された仕事を途中で投げ出すとか、(アッサム州のチャルゴラ地域 (Chargola Valley) にある茶畑で働くクーリーのように) 逃散するといったものがある<sup>(55)</sup>。これらの例に照らして考えると、いわゆる自由な賃金労働者のストライキは、商品化された労働の搾取に抵抗するさまざまな連帯行動のひとつの形にすぎない。また、反面、自由な賃金労働者もまた、リンチや暴動や叛乱や放火や爆弾といった、自由でない労働者がよく用いると思われる手段を、闘争の過程でしばしば用いてきたことに気づかされる。

こうして、グローバル・アプローチは、伝統的な賃金労働者の研究にも貢献できるのである。方法的な弱点を抱えているとはいえ、[ニューヨーク州立大学ビンガムトン校にある] ブローデル・センターの世界労働調査グループ (Research Working Group on World Labor) が1980年から蓄積したグローバルなストライキ統計は、19世紀末からのストライキの傾向について、そしてとりわけ世界システムにおける「中核」と「周辺」の差異についての、宝庫である。最も良く知られている研究成果は、言うまでもなく、ビヴァリー・シルヴァーが2003年に出版した『労働の力 (*Forces of Labor*)』である。繊維産業と自動車産業のデータを用いて、シルヴァーは労働運動と

(54) Sjaak van der Velden et al., eds., *Strikes Around the World, 1968-2005* (Amsterdam, 2007); Marcel van der Linden, ed., *Social Security Mutualism: The Comparative History of Mutual Benefit Societies* (Berne, 1996); Abram de Swaan and Marcel van der Linden, eds., *Mutualist Microfinance: Informal Savings Funds from the Global Periphery to the Core?* (Amsterdam, 2006). 叛乱のグローバル・ヒストリーが2011年6月にIISHで開かれた(コーディネーターはマーカス・レディカー (Marcus Rediker), ニクラス・フリクマン (Niklas Frykman), レックス・ヘールマン・ファン・ヴォス (Lex Heerma van Voss) である)。消費者生活協同組合についての大規模なプロジェクトが、スウェーデンの労働運動文書館・図書館 (Arbetsrörelsens Arkiv och Bibliotek) によって進められている(コーディネーターはメアリー・ヒルソン (Mary Hilson) とシルケ・ノイシンガー (Silke Neunsinger) である)。

(55) このチャルゴラ逃散 (Chargola exodus) についてはニティン・ヴァルマ (Nitin Varma) がモノグラフを準備している。[*Coolies of Capitalism: Assam Tea and the Making of Coolie Labour* (Berlin, Boston, De Gruyter Oldenbourg, 2017) と思われる。]

資本との間に一定のロジックが働いていることを発見した。（プロダクト・ライフ・サイクルや国家間の紛争をはじめとする）要素に従って、また度重なる労働者の抵抗に対応し、資本は利潤維持のために次の4つの戦略をとる。(1)「空間的対応」、すなわち賃金が安く御しやすい労働者のいる地域に工場を移転する。(2)「技術的・組織的対応」、すなわち労働過程を変化させる。(3)「製品の対応」、すなわち新しい産業分野や製品系列に資本を移動する。そして(4)「財政的対応」、すなわち資本を生産や交易から金融や投機に移動する。労働者の抵抗に対するこれらの対応は、「従来の慣行や生活習慣を危険にさらす」。けれども同時に、「グローバル経済のなかで拡大し利潤も増大している部門においては、労働者階級に新たな交渉力を与えることもある<sup>(56)</sup>」。われわれは労働者階級の概念を広くとってきたが、そうすることによって、以上の4つの対応策に、「労働様式(labor modes)的対応」と言うべきものを付け加えることができる。これは、何らかの理由で地位が脅かされそうになったとき、使用者が労働力商品化のある形態を別の形態に置き換えることを指す。例えば「自由な」賃金労働者を債務労働者(debt bondage)や自営業者などに置き換えたりするのである。

この文脈で最後に述べたいのは、労働者の政治組織についてである。労働党や社会民主党や共産党は、労働者階級の政治的代表であると一般には考えられている。けれどもこれらの政党は、およそ1880年代から1930年代という、特定の期間に生まれている。エリック・ホブズボームは30年前に次のように述べた。

「これらの政党や、その後継政党は、まだ存続しており、大きな影響をもっていたりもする。けれども、もはや存在していなかったり、あるいは第二次世界大戦以前に社会主義者や共産主義者の影響力が重要であったところでは、そのような政党がそれ以後現われてこない。このことはとりわけ「第三世界」について言えることである。」<sup>(57)</sup>

この指摘には、ブラジルで1980年に結成され急成長した労働者党(Workers' Party)という、重要な例外がある\*。とはいえ、それ以外の国々ではホブズボームの指摘が当てはまる。この経験則からどのような因果関係が導かれるのだろうか。グローバル・サウスにおける新しい労働者階級は、とりわけラディカルな宗教を媒介として、不満を表現しているようである。福音主義的でカリスマ的な運動が世界中に広がり、貧しい国々においてイスラムの潮流が拡大しているのは、果たして階級形成の兆しだろうか。

#### 4 行く手に見えてくるもの

24世紀前、ギリシアの哲人プラトンは、地中海を取り巻く国々がはるかに広大な世界のごく一部にすぎないと考えていた。プラトンはこう書いた。その国々の住民は「沼地に棲むアリやカエル

(56) Silver, *Forces of Labor*, 131-2.

(57) Eric J. Hobsbawm, *Worlds of Labour: Future Studies in the History of Labour* (London, 1984), 60.

\*軍事政権下のブラジルで、1980年に労働者党が結成された。党首ルイス・イナシオ・ルーラ・ダ・シルヴァは、2002年に大統領に選ばれた。ルーラ政権は、経済成長を達成するとともに、家族手当(ボルサ・ファミリア)などの社会政策を推進した。小池洋一『社会自由主義国家——ブラジルの「第三の道」』(新評論, 2014年)。

のようなものであって、「他の沼地にも同類がいる」ことにまったく気づいていない<sup>(58)</sup>。同じように、われわれ労働史・労働者階級史の研究者たちは、自分たちの専門分野が、これまで教えられていたよりもずっと広い知的領域に関わりがあるということに、いま気づきつつある。この論文が取り上げてきた「新世界」の地図を描き切って、その全体像を見渡せるようにするには、まだ相当の時間がかかるだろう。その作業を行なうためには、自分たちの固有の持ち場、すなわちヨーロッパと北アメリカにおける労働史・労働者階級史についての認識も改めなくてはならない。グローバル・ノースを無視してグローバル・サウスの歴史を描くのがほとんど不可能なのと同じように、グローバル・ノースの歴史をグローバル・サウスとの連関を抜きにして描くことはできない。すでに多くのことが成し遂げられたとはいえ、まだ多くの実証的・理論的課題が残されている。われわれは出発点に立ったばかりなのである。

(マルセル・ファン・デア・リンデン 社会史国際研究所上級研究員／アムステルダム大学教授)

(きのした・じゅん 法政大学大原社会問題研究所嘱託研究員／元國學院大學経済学部教授)

---

(58) *Phaedo*, 109b. Trans. Benjamin Jowitt. プラトン『パイドン』。



---

# 訳者解説

木下 順

---

はじめに

- 1 翻訳の背景
- 2 ILWCH について
- 3 ILWCH 特集号のコメント
- 4 訳者によるコメント

はじめに

本稿は、オランダの労働史家マルセル・ファン・デア・リンデン (Marcel van der Linden) が 2012 年に『国際労働史・労働者階級史研究 (*International Labor and Working-Class History*)』誌 (以下 ILWCH と略) の第 82 号 (2012 年秋) に発表した, “The Promise and Challenges of Global Labor History” の全訳である。

リンデンは 1952 年に生まれ、社会史国際研究所 (IISH) の研究部長 (director of research) を 2014 年まで務め、現在は上級研究員である。またアムステルダム大学社会科学・行動科学学部 (Faculty of Social and Behavioural Sciences) 教授として社会運動史を教えている<sup>(1)</sup>。その他に 2009 年から 2012 年にかけて中国の南京大学で兼任教授 (Concurrent Professor) を務めた。

リンデンは多産な著作家であって、大学のサイトに掲載されたこの 10 年ほどの論文を数えてみると、2008 年 3 本、2009 年 6 本、2010 年 2 本、そして 2016 年には、数年間のブランクを埋めるかのように、11 本の論文を発表している<sup>(2)</sup>。また 2003 年に『トランスナショナル・ヒストリー』、2008 年に『世界の労働者』を刊行し、2016 年にはユルゲン・コッカと『資本主義』を編集している<sup>(3)</sup>。

---

\*リンデンさんは、翻訳にあたって私の疑問点をわかりやすく説明してくださいました。また、翻訳し解説を書くにあたっては、榎一江、金子良事、鈴木玲、関口定一、二村一夫、原伸子をはじめとする多くの方々にアドバイスをいただきました。誌面を借りて感謝いたします。それでも生じているであろう誤訳・誤読が著者の責任であることは言うまでもありません。

(1) <http://www.uva.nl/profiel/1/i/m.m.vanderlinden/m.m.van-der-linden.html> 2017 年 5 月 1 日取得。

(2) <http://www.uva.nl/profiel/1/i/m.m.vanderlinden/m.m.van-der-linden.html> 2017 年 7 月 1 日取得。

(3) Marcel van der Linden, *Transnational Labour History: Explorations* (Ashgate, 2003); Marcel van der Linden, *Workers of the World: Essays toward a Global Labor History* (Brill, 2008); Jürgen Kocka and Marcel van der Linden, eds., *Capitalism: the Reemergence of a Historical Concept* (Bloomsbury Academic, 2016).

## 1 翻訳の背景

この論文を翻訳しようと思いついた直接のきっかけは、たまたまリンデンさんにお目にかかる機会があったからである。今年（2017年）の3月に大原社会問題研究所から派遣され、インドのニューデリー<sup>(4)</sup>で開かれたグローバル・レイバー・ヒストリー・ネットワーク（GLHN）第1回会議に出席した。（その内容については、本誌8月号（706号）「GLHNのニューデリー会議に参加して」（110ページ）を参照されたい。）この集まりを司会したのが、主催者であるインドの研究者たちとともに、リンデンさんであった。外国で初めて経験する国際会議で、驚きの連続であったが、この司会者の手際の良さもそのひとつだった<sup>(5)</sup>。

それもそのはず。経歴を見ると、リンデンさんは国際会議や編集会議のベテランであって、世界中の社会史・労働史の研究動向をつぶさに把握している。たとえば2005年に創立された国際社会史学会では、創立時から会長を務めている。そのように国際的には著名であるのだが、業績はこれまで1点しか翻訳されておらず<sup>(6)</sup>、日本では無名に等しい。

しかもリンデンさんはグローバル・レイバー・ヒストリーの研究をリードしてきた研究者であり組織者である。欧米における労働史の研究は、20世紀初頭にコモンズら制度学派の研究者によっておもにストライキや労働組合や白人男性の組織労働者を対象とする旧労働史（old labor history）が開拓された。そして1960年代からは、E.P. トムスンやハーバート・ガットマンやデイヴィッド・モンゴメリーらによって、職場や地域での人びとの集団行動を取り上げた新労働史（new labor history）が開拓された。最初は白人男性が取り上げられたけれども、やがて黒人、女性なども対象になった<sup>(7)</sup>。そして20世紀から21世紀への転換期に、この論文が述べているように、国境を越えたトランスナショナルな、あるいはグローバルな労働史が登場した。リンデンは労働史のこの新動向を牽引してきた研究者のひとりなのである。

そこで、本人に直接、「グローバル・レイバー・ヒストリーに関するあなたの論文を日本語に翻訳したいけれども、何がいいでしょうか」と聞いてみた。すると彼は即座に「この論文を訳してくれ」と言った。

この説明からおわかりのように、訳者はこの新しい研究分野ないし研究方法のエキスパートとしてこの論文を翻訳したのではない。そうではなく、それを理解するために、そして関心をもつ人び

---

(4) 正確にはニューデリーの東隣にある新興の街ノイダ（Noida）である。そこにある労働・雇用省の研修施設「ギリ国立労働研究・研修機構（V.V.Giri National Labour Institute）」が会場であった。この施設はインドのJILPT（労働政策研究・研修機構）に相当する。ただ、興味深いのは、労働史に関する研究センターがあって、大原社研のように労働組合の史料を精力的に収集していることである。

(5) 会議の全容は本誌8月号（706号）をご覧いただきたい。また議事録旨がITHのサイト [http://www.ith.or.at/partner\\_e/glhn\\_2017\\_conference\\_report.pdf](http://www.ith.or.at/partner_e/glhn_2017_conference_report.pdf) に掲載されている。

(6) リンデン、ソープ著、浅見和彦・五十嵐仁訳「革命的サンジカリズムの台頭と衰退」『大原社会問題研究所雑誌』386号、1991年1月。

(7) 合衆国における労働史の研究史については、「アメリカにおける「新労働史学」の展開とその諸性格」（『愛知学院大学文学部紀要』35号、2005年）をはじめとする野村達朗の論文を参照されたい。

と対話することを目的として、翻訳という手段をとったのである。

## 2 ILWCH について

リンデン論文が掲載されたのは ILWCH の第 82 号である。この論文が冒頭で述べているように、この雑誌はグローバル・レイバー・ヒストリーの出発点である。そこで、その歩みをより詳しく見てみよう<sup>(8)</sup>。

ILWCH の前身は、ドイツ史家のボブ・ホーラーによって 1971 年にカリフォルニアで創刊された『ヨーロッパ労働史・労働者階級史ニューズレター』である。これは研究者のあいだで互いに動向を知らせ合う、文字どおりのニューズレターであったが、それを拡充して ILWCH へと誌名変更した翌年（1977 年）、ホーラーが逝去した。存亡の危機に直面した同人たちが継承者を捜し、ホーラーの母校であるピッツバーグ大学で労働史を教えていたディヴィッド・モンゴメリーに白羽の矢を立てた。

モンゴメリーはその 10 年ほど前、1967 年から 1969 年にかけてウォーリック大学に滞在し、E.P. トムスンとともに社会史コースをつくり上げた。豊かな国際的人脈を駆使しながら、モンゴメリーは ILWCH を一人前の学術雑誌にするとともに、「ニューズレター」の特徴であった学会・研究会の内容紹介や書評などの記事も継続した。こうして、ILWCH をハブとする研究者のネットワークがアメリカ合衆国（以下、アメリカと略）からヨーロッパへと広がっていった。

要するに ILWCH は大西洋をまたいで労働史研究者の絆を深めたのである。しかし、ここで重要なことは、特定の研究方法を普及させつつ絆を深めたのではなく、さまざまな考えをもった研究者にコメンテーターとして執筆してもらうことによって、異論や反論を積極的に引き出すようにしたことである。その意味で、世間によくある、特定の色のついた「絆」ではない。むしろ処士横議のネットワークと呼ぶべきだろう。これはモンゴメリーという、アメリカ共産党員の機械工としてマッカーシズムを生き延び、その後離党した経験をもつ、懐の深い研究者・教育者の生き方そのものであった<sup>(9)</sup>。

## 3 ILWCH 特集号のコメント

リンデン論文に寄せられたコメントは、そのような雑誌にふさわしく、いずれも歯に衣着せぬ率直なものである。それぞれのコメンテーターが前提としている歴史研究にはあまり詳しくないので、忠実な要約にはなっていないかもしれないが、理解できたかぎりで紹介したい。

フランコ・バルキーシ（Franco Barchiesi, オハイオ州立大学）は、アフリカの労働史に即して、

(8) 以下は ILWCH (82) Fall 2011 の諸論文にもとづく。

(9) モンゴメリーはこの号が刊行される前の年（2011 年 12 月）に亡くなった。そこで緊急に、この号で追悼特集が組まれた。本稿の記述はこれに寄せられた論文を参考に行っている。なおモンゴメリーの経歴については、Marcel van der Linden, “Obituary: David Montgomery,” *International Review of Social History* (57) 2012 および MARHO, *Visions of History* (Pantheon, 1983) [近藤和彦・野村達朗編訳『歴史家たち』（名古屋大学出版会、1990 年）] を参照されたい。

リンデンがもっぱら都市部の賃労働者を念頭に置いていると指摘する。アフリカ諸国では、独立のあと、政府が人びとに規律を与えるため雇用労働者になることを強いた。その結果、人びとは賃労働を忌避し「プロレタリア化への抵抗 (resistance to proletarianization)」を行っているというのである。

ピーター・ウィン (Peter Winn, タフツ大学) は、チリと中国の労働史研究を、国家権力との関係のなかで、対比的に取り上げている。チリでは、ピノチェト政権以来の新自由主義が猛威をふるうなかで、学生たちは社会史・労働史に熱狂的な関心を抱いている。それとは逆に、中国の労働史は権威主義体制を正当化してきたので、学生たちの関心はきわめて低い。

ユルゲン・コッカ (Jurgen Kocka, ベルリン社会科学研究所) は、リンデンのように労働階級概念を拡大して奴隷や自営業者なども含めてしまえば、共通の経験やものの見方が見失われ、階級形成の道筋を明らかにできないのではないか、と疑問を呈している。

ドロシー・スー・コブル (Dorothy Sue Cobble, ラトガース大学) は、グローバル・レイバー・ヒストリーの新しさを強調するあまり、リンデンが従来の労働史の遺産を過小評価していると言う。たとえば19世紀アメリカについての労働史研究は、工場労働者だけを研究したのではなく、小作農や自営業者や主婦などを包摂した「生産階級 (producing class)」の存在を明らかにし、実証研究を積み重ねてきた。そのような研究史が無視されている。コブルはこう批判した。

プラサナン・パルササラティ (Prasannan Parthasarathi, ボストン・カレッジ) は、アジア経済史の視点から、①労働者の生存戦略 (survival strategies) を家族やジェンダーの視点から考察すること、②これまでのように体制変革を前提としないで、労働者の政治活動をそれとして考察すること、そして③国家の政策を積極的に導入することを提案している。

#### 4 訳者によるコメント

訳者はまだ関連文献を読みこなしていないので、深い内容の解説を書くことはできない。しかし、翻訳を進めながら考えたことがあるので、今後のためにノートしておきたい。

##### (1) 「労働力の再生産」の視点を導入すべきではないか

リンデンはマルクス以来の労働者概念を再検討し、労働者を「広義の賃労働者」として把握することを提唱している。これは重要な問題提起であるが、その場合には「労働力の再生産」の視点を組み入れる必要があるのではないか。つまり、パルササラティも指摘するように、労働者の生存戦略 (survival strategies) を、そしてさらに進んで生活向上戦略をも視野に入れて、働く人びとの社会的存在を広くとるべきだろう<sup>(10)</sup>。

歴史的に見れば、イギリスにおいて産業革命が進行するなかで、男性稼ぎ手 (breadwinner) に家族賃金 (family wages) が支払われ、女性は家事労働と補助的な賃労働に従事した。欧米そして

(10) この論点は、2017年6月14日に東京大学本郷キャンパスで開かれた政治経済学・経済史学会の春季総合研究会「グローバル経済史にジェンダー視点を接続する」における報告・討論を聴講するなかで、気づくことができた。

日本も含む、20世紀までの先進諸国における資本主義は、この家父長制家族を基盤とした労働力の再生産を社会的に普及させてきた。わかりやすく言えば、高度成長期の日本の「家庭科」検定教科書のように、「お父さんは会社で仕事をし、お母さんは家で家事をする」家庭を典型的な家族としてきたのである。

その意味で、リンデンのように賃労働の概念を拡大しようとするとき、それぞれの時代や地域における再生産のあり方を、ジェンダーや家族の視点で把握する必要がある。そうすれば働く人びとの生活が確かな範疇として析出されてくるのではないだろうか。

さらに付け加えるならば、この論点はとりわけ日本の労働史を考察する場合に独特の意味を帯びてくるはずである。

およそ1920年代から形成され1990年代まで発展してきた、いわゆる日本の経営は、新規学卒者として一括採用されたあと定年まで会社で働き続ける男性労働者を、基幹的な労働力としてきた。そして女性は、短い正社員生活のあと、彼と対になって「家庭を守り」家事・育児・介護に携わる存在として位置づけられた。このような家父長制家族を労働力再生産の基盤としていた蓄積体制が、いままさに解体と再編成のなかにある。その意味で日本の労働を考えるうえでも、再生産を踏まえた賃労働概念を再検討する必要があるだろう<sup>(11)</sup>。

## (2) 東アジアをどう位置づけるべきか

リンデンのグローバルな視野のなかに日本は入っていないように思われる<sup>(12)</sup>。また本稿の最初でいくつかの事例を挙げながら説明されているように、グローバル・レイバー・ヒストリーの研究運動はヨーロッパに発し、南アジア、アフリカ、南北アメリカ大陸に広がっている。その一方で日本を含む東アジアではあまり研究交流が活発ではないようである。

これについては、本誌8月号（706号）「ニューデリー会議に参加して」の最後に次のように書いた。

「日本の近代史をふりかえってみると、幕末・明治期には世界システムの周辺にいた。その後、準周辺（semi-periphery）、中枢——五大国！——へと上昇したのち、敗戦を挟んで、ふたたび中枢に復活した。そして、中国も含むアジアの多くの国々とともに、貿易、資本移動、技術移転などによって一大経済圏を形成するに至った（杉原薫『アジア太平洋経済圏の興隆』）。」

「グローバルサウス対グローバルノース」という把握では、日本の近代史は捉えられない。

実は、この会議の目的のひとつが、東アジアという弱い環を何とかすることにあったようである。アジアからは、日本のほかに、中国の研究者も参加している<sup>(13)</sup>。

翻って日本の研究状況を見ると、グローバル・ヒストリーに対する関心は強く、多くの書物がすでに翻訳されている。また日本史においてもアジア間貿易や東シナ海海域をはじめ研究は広がり深

(11) 関西女の労働問題研究会編『竹中恵美子が語る労働とジェンダー』（ドメス出版、2004年）。

(12) 日露戦争が世界の労働者に大きな影響を与えたという記述（本誌77頁）は、重要な指摘ではあるが、これで日本が組み込まれているとは言えないだろう。

(13) モンゴメリーは亡くなる前、学生の主導で始まった五・四運動に参加した上海や香港の労働者も含む、グローバルな半植民地運動の歴史研究を準備しつつあった。“A Conversation with David Montgomery, May 27, 2011” *ILWCH* (82) 2013, p.24.



化している。

では労働史の分野ではどうかというと、まだ活発とは言えない状況である。グローバル・ヒストリーは労働の問題を焦点に据えなければならない。本論文が日本におけるグローバル・レイバー・ヒストリーの研究を促すことになれば幸いである。

### (3) 「管理」の問題をどう考えるか

リンデンは後半で、従属論に関連して、では「中枢国の「高賃金」は、どの程度、豊かな国と貧しい国との不等価交換の直接の結果なのだろうか」と自問し、それに自答して次のように書いている。

「中枢国労働者の報酬は、その多くの部分が、平均生産性が高いこと、技能が高いこと、組織行動の能力（organizing ability）が高いこと、そしてその結果として達成される高い内生的経済成長（indigenous economic growth）に帰することができる。この点についてはさらに科学的研究を進める必要があるだろう。」（本誌 74-75 頁）

これは先に指摘した、「東アジアがグローバル・レイバー・ヒストリーの弱い環だ」という論点にも関連する。

つまりこの個所は、中枢国の労働史を研究するときには人事管理、生産管理、組織行動など、経営や管理の問題を考えなければならないことを示唆しているのである<sup>(14)</sup>。

その意味で、グローバル・レイバー・ヒストリーの対象には生産性の向上や、技能養成や、人事管理、あるいは国際的な労働政治なども含まれる。つまり生産性運動や、管理技術の国際的伝播や、世界労連・国際自由労連なども、グローバル・レイバー・ヒストリーの研究対象となる。この点は本論文ではほとんど扱われていない。

他方、この論文がこれからの日本の労働史研究に示唆するものも大きいと思われる。というのは、2000 年頃から、「日本の経営」華やかなりし頃には巖のように盤石だと思われた体制が、崩壊する兆しを見せているからである。この数年間を見ても、東京電力、シャープ、東芝などの衰退は、まるで巨岩に生じたひび割れのように見える。

それにともない、さまざまな形での非正規労働者が増えている。それとともに、非正規労働を対象とした労働史研究が活況を呈している。今後はそれらが労働史研究の主流になってゆくのではないだろうか。

だとすれば、伝統的な賃労働者に踟躕した従来の労働史に再検討を迫る、この論文の意義は、日本の研究者にとっても大きいと言わねばならない。

（きのした・じゅん 法政大学大原社会問題研究所嘱託研究員／元國學院大學経済学部教授）

---

(14) リンデン論文も管理の問題に言及しているが、それは奴隷制に関連するものである（本誌 76 頁）。